

---

---

# 述語の名詞性から見た 中世日本語における主語を表す助詞「の」

天草版平家物語を対象にして

金 銀 珠

This paper discusses the semantic and syntactic similarities between genitive subject marker and genitive marker in Middle Japanese. First, this paper considers the semantic and syntactic characteristics of the clauses in which the genitive subject marker *NO* is used. After clarifying the characteristics of the clauses with *NO*, this paper examines the semantic and syntactic characteristics of the semantic predicates in noun phrases in which genitive marker *NO* is used. Subsequently, comparing the two structure's characteristics, this paper concludes that the two structures share the same semantic and syntactic characteristics with each other.

Keywords: nouniness of predicates, genitive subject

## 1. はじめに

日本語の歴史的変化の考察において、主語を表す助詞「の」と「が」の使い分けとその変化は、主要な研究テーマの一つである。中世日本語の「の」と「が」の使い分けについても、統語の特徴や述語の種類等の側面から詳細な検討を行っている先行研究は多い。『天草版平家物語』を対象にして中世の日本語を調査したものに山田昌裕 (2000a, 2000b) がある。これは、原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』における「の」と「が」を待遇性と構文、述語の性質に分けて、詳細に比較したものであるが、「の」と「が」の史の変遷に注目しているため、『天草版平家物語』における「の」と「が」の使い方の全体像が掴みにくい。また、「の」と「が」の歴史的な変遷の比較に主眼があるため、他の言語現象との関係は捉えられていない。大野晋 (1977)、江口正弘 (1995) は『覚一本平家物語』と『天草版平家物語』を用いて「の」と「が」について主に上接語の待遇性という観点から考察し、その史の変遷を論じているが、山田 (2000a, 2000b) と同様、「の」と「が」の比較にとどまり、他の言語現象との関連性については考察が及ばない。しか

し、「の」と「が」の問題を考える時、両者の比較だけに焦点を当てるのは、次の二つの面を考慮すると不十分である。まず、「の」と「が」に関して起きた言語変化が主語を表す助詞の機能に注目する一方で、他の言語状況が絡む体系の中での要因が考えられていないということである。ある文法機能を担う言語形式の変化は、言語の体系が持っている他の変化に起因して起きることもある。次に、主語を表す助詞と関連して「の」と「が」の比較という観点が化石化してくると、「の」と「が」がもつ他の機能との関係性が捉えられなくなる。例えば、助詞「の」は主語を表すという役割以外に名詞と名詞をつなぐという役割を、古代語から現代語にかけて、変わらず、果たしている。しかし、主語を表す助詞「の」については、名詞と名詞をつなぐ助詞「の」（連体助詞）との関係は、まだ未開拓の領域にある。

このような従来の研究の問題点を踏まえて、ここでは、まず、主語を表す助詞「の」に見られる特徴を、名詞と名詞をつなぐ連体助詞「の」との関連から捉え直すことを目的とする。

## 2. 資料と分析の手順

本稿では『天草版平家物語』の本文として江口正弘（1986）の翻刻を用いた。分析の手順は、まず、①主語を表す助詞「の」と「が」の用例を取り出し、両者の用例を分析し、「の」が用いられる節の特徴を明らかにする。「が」と比較するのは、比較という作業を通して、「の」の特徴を浮き彫りにするためである。次に、①の調査から得た特徴を連体助詞「の」との関係から捉える。①の「の」と「が」との比較には、統語構造の違い（主節終止・引用節終止・従属節・連体節）と述語の違い（形容詞・自動詞・他動詞および自動詞・他動詞の意味的特徴による下位分類）、述語の統語的力（介在要素の有無とその質）の違い、の3点に注目する。

## 3. 『天草版平家物語』における「の」と「が」の使用状況

本節では、「の」と「が」が主語を表す節の統語構造、述語の性質、述語の統語的力に注目して、その使用状況を考察する。

### 3.1 統語構造の違いによる「の」と「が」の使用状況

ここでは、統語構造の違いによる「の」と「が」の分布について考察する。次の(1)と(2)に「の」と「が」が用いられる統語構造を示しておく。

- (1) 「の」が用いられる統語構造
- a. 連体節：世のあまねく仰ぎ敬うたことわ。(p. 11)
  - b. 従属節：宰相殿のさてござれば、～。(p. 36)
  - c. 主節終止：大臣殿のすでに関東えを下りある。(p. 357)
  - d. 引用節終止：いかなる人の漆ぬりけんとゆうてはやされてあった。(p. 7)
- (2) 「が」が用いられる統語構造
- a. 連体節：重盛がかえり聞かうずるところをば、～。(p. 33)
  - b. 従属節：その人が失せたらば、～。(p. 14)
  - c. 主節終止：世に四恩がござる。(p. 45)
  - d. 引用節終止：京より信俊が参ったと、申したれば、～。(p. 62)

統語構造は、その違いがはっきりしているものが多いが、従属節と連体節については、その境目が確かではない例も見られる。この場合は、文脈を基準にして判断した。例えば、「潮の満ちくるに、そこはかともない藻くづとものゆられよるなかに」（潮が満ちくると、無数の藻くづが波に揺られて寄るなかに）」(p. 67) の用例は、節の後に助詞「に」が原因理由を表す接続助詞と解釈されるため、従属節と処理した。同じ助詞「に」でも「成親が切られうずるにをいてわ、少将とても甲斐ない命生きて何につかまつらうぞ」(成親が切られることならば、少将もこの甲斐ない命を生きて何になりましょうか) (p. 41) では、格助詞として解釈されるため、連体節と処理した。また、「の」と「が」が複数の節の主語になる場合は、意味的に強く結び付いている最後の語を節の述語として処理した。例えば、「～と言うものが川尻え源氏どもが向うたと聞いて、蹴散らかさうと言うて、五百余りで向うたが、～」(p. 191) は、「～と言うもの」が「聞いて」「言うて」「向うた」の三つの述語の主語として解釈される。この場合、最後の述語「向うた」を節の述語とし、従属節と処理した。これは、次節でみる述語の違いによる考察においても同様で、述語は「向うた」を基準にして考えた。

このような統語構造の違いによる「の」と「が」の使用状況を見ると、次の表1のようになる。

表1 統語構造の違いによる「の」と「が」の使用状況

	引用節終止	主節終止	連体節	従属節	合計
の	8 (2.6%)	1 (0.3%)	251 (82.0%)	46 (15.0%)	306 (100%)
が	58 (8.1%)	124 (17.3%)	192 (26.8%)	341 (47.6%)	715 (100%)

注：合計は完全に100%にならない場合もあるが、わかりやすくするため、100%に統一する。

表1の使用状況からわかることを整理すると、次のようになる。

- (3) 「の」は「連体節」に集中して用いられるという著しい片寄りが見られる。
- (4) 「の」は「連体節→従属節→引用節終止→主節終止」の順にその使用が減っていく。構造的に見ると、全体的に名詞のようなものとして機能している小さい構造の連体節に集中し、文に近い大きい構造になっていくほど、「の」の使用が減少していく。これは、同じ終止を表すものでも引用節における用例（8例）が主節終止（1例）の用例より多いことから確認できる。
- (5) 「が」は主節終止・引用節終止・連体節・従属節のどの節においても「の」より使用率が高く、よく使われている。
- (6) 「が」は構造的には「従属節→連体節→主節終止→引用節終止」の順に使用が減っていく<sup>1)</sup>。従属節で使用率が一番高いが、全体的に「の」ほどの片寄りはなく、連体節と文を終止する主節終止にも一定の使用を示している。文の中のどこに使われるのかという観点からすると、特段の片寄りが無い「が」の方が統語構造による制約が少ない。

### 3.2 述語の種類から見た「の」と「が」の使用状況

次に、節の中の述語の種類による「の」と「が」の使用状況を見る。述語の種類はまず、品詞別に名詞・形容詞（ナリ活用形容動詞を含む）・動詞に分けて全体的な使用状況を確認する。その後、使用が多い動詞について、さらに、下位分類して考察する。

述語の処理については、次の二点についてその基準を示しておく。まず、派生接辞が接続している場合は、派生接辞を基準として語類を判断した。例えば、「罪の深からうずることわ疑いない」(p. 103)の下線部は形容詞「深い」のナリ活用で、全体で動詞となっているため、動詞として処理した。同様に「不覚の涙が抑えがたいと仰せられたれば」(p. 318)の下線部「抑えがたい」は派生接辞「がたい」によって全体で形容詞となっているため、形容詞として処理した。二つ目に、「人のあがめ敬うことわ」(p. 13)、「滴がみなぎり落ちて、～」(p. 66)の下線部の「あがめ敬う」「みなぎり落ちる」のような複合動詞の場合は、統語的な主要部である後の部分を述語として処理した。

#### 3.2.1 品詞の違いによる「の」と「が」の使用状況

まず、述語を名詞、形容詞（ナリ活用形容動詞を含む）、動詞に分けて、「の」と「が」の使用状況を示すと、以下の表2のようになる。

表2 品詞の違いによる「の」と「が」の使用状況

	名詞	形容詞	動詞	合計
の	0 (0%)	48 (15.6%)	258 (84.3%)	306 (100%)
が	11 (1.5%)	77 (10.7%)	627 (87.6%)	715 (100%)

表2の使用状況からわかることを整理すると、次のようになる。

- (7) 品詞別に見た述語の分布は、「の」と「が」のいずれにおいても動詞が最も多く、「動詞→形容詞→名詞」の順に使用が減っていく。
- (8) 「の」については名詞述語の使用例がないことが注目される。「が」は「忠盛目がすがめであったによって」(p. 6)のように名詞述語の例が見られるが、「の」が名詞述語の主語を表示する例は見られない。

(8)に示した、名詞述語の場合に「の」が主語を表す例が見られないのは、例えば、上記(8)の例を「目のすがめであったによって」のように「が」を「の」に変えた場合、「目の」が名詞「すがめ」を修飾し、「目のすがめ」全体が述語として解釈される可能性があり、このような構造上の解釈のゆれを避けているためと考えられる。すなわち、「の」の後に名詞が来て、その名詞が述語になる機能と被修飾名詞になる機能の二つの役割が衝突する場合、被修飾名詞の機能を優先するのである。また、「の」は名詞述語の断定の形式「である」(ヂャ、デゴザル、ナリ等を含む)までには構文的な力が及ばないという理由も考えられる。「が」は「それが最後と」(それが最後であると)(p. 24)のような断定の意味を持つ名詞述語の用例が見られるが、この用例を「それの最後と」のように「の」に変えると、「最後」に断定の意味を読み取ることができなくなる。これは、前節で見たように、「の」は全体が名詞として機能する連体節に集中して用いられており、文になるほど、その使用が減っていったこととも関係する。文の述語は、連体節における述語とは違い、これはこうである、これはこうではない、といった「である」に類似する話し手の文で述べられる事態に対する断定の機能を伴っており、そのため、「の」は使用が減っていったと考えられる。

### 3.2.2 動詞述語の性質による「の」と「が」の使用状況

次に、「の」と「が」において動詞述語が最も多く、動詞述語の場合は、語の意味や統語的振舞が異なるものが多いため、動詞述語について、より詳細に検討してみる。まず、動詞述語を他動詞と自動詞に分けた時の「の」と「が」の使用分布を次の表3にまとめる。

表3 自動詞・他動詞による「の」と「が」の使用状況

	自動詞	他動詞	合計
の	184 (71.3%)	74 (28.6%)	258 (100%)
が	434 (69.2%)	193 (30.7%)	627 (100%)

表3で見ると、「の」と「が」は共に他動詞より自動詞によく用いられており、いずれも7割程度の使用率を示している。次に、自動詞述語と他動詞述語をさらに、語の意味的性質によって分けて下位分類して、その分布を見る。まず、自動詞述語について、「存在・状態」「変化」「主体動作」「知覚・感情」の意味的性質に分けて、その使用状況を示すと、次の表4のようになる。それぞれの語の例を表の下に示しておく。

表4 自動詞述語の意味的性質による「の」と「が」の使用状況

	存在・状態	変化	主体動作	知覚・感情	合計
の	70 (38.0%)	72 (39.1%)	35 (19.0%)	7 (3.8%)	184 (100%)
が	188 (43.3%)	133 (30.6%)	96 (22.1%)	17 (3.9%)	434 (100%)

存在・状態：ある、ござる、いる、漫々とする、住む、等

変化：亡びる、失せる、暮れ行く、更ける、尽きる、かきなる、満ちる、起こる、等

主体動作：鳴く、泣く、吹く、乗る、参る、下る、来る、飛び渡る、行き過ぐる、等

知覚・感情：見える、見ゆる、聞こえる、等

表4で見ると、自動詞述語の意味的性質による「の」と「が」の使用状況は、類似した傾向を示している。「の」は「存在・状態および変化→主体動作→知覚・感情」の順に使用が減っていき、「が」は「存在・状態→変化→主体動作→知覚・感情」の順に使用が減っていく。「が」は「の」に比べて、存在・状態の割合が変化より少し高いが、大きな開きは見られない。また、全体的な傾向として、「の」と「が」は自動詞の中でも主体動作の意味をもつ語類が、他の語類に比べて相対的に少ないことが指摘できる。表4で知覚・感情を表す動詞は主体の動作が伴わない点で存在・状態を表す語類と同じ性質を持つ。自動詞述語の場合、「の」と「が」は共に主体の動作が伴わない語類（存在・状態、変化と知覚・感情）と変化を表す語類が多く現れており、主体動作を表す語類は比較的少数で、2割前後にとどまっている。

次に、他動詞述語について見る。他動詞述語については、「所有」「知覚・思考・感情」「主体動作」「主体動作対象変化」の意味的性質に分けて、その使用状況を示すと、次の表5のようになる。それぞれの語の例を表の下に示しておく。

表5 他動詞述語の意味的性質による「の」と「が」の使用状況

	所有	知覚・思考・感情	主体動作	主体動作対象変化	合計
の	1 (1.3%)	18 (24.3%)	39 (52.7%)	16 (21.6%)	74 (100%)
が	0 (0%)	34 (17.6%)	99 (51.2%)	60 (31.0%)	193 (100%)

所有：(子を) 持つ

知覚・思考・感情：聞く、知る、見る、思う、憚る、愛す、存ずる、あがめ敬う、等

主体動作：申す、書く、言う、詠む、読む、飲む、もてなす、(合戦) する、等

主体動作対象変化：塗る、流す、立てる、切る、射る、取る、討つ、落とす、作る、等

他動詞の分類で「主体動作対象変化」を表す動詞は主体の動作によって対象に変化が加えられる動詞で最も典型的な他動詞である<sup>2)</sup>(ヤコブセン1989、角田太作1991参照)。「主体動作」動詞は、主体の動作はあるが、対象変化を伴わない語類である。表5で「の」と「が」は同じく、主体動作動詞が使われている例が最も多い。また、全体的な傾向も典型的な他動詞の主体動作対象変化を表す動詞より、主体動作動詞が多い点で類似している。

以上の動詞述語の性質の違いによる「の」と「が」の使用状況を整理すると、次のようになる。

- (9) 「の」と「が」の後の動詞述語は、他動詞より自動詞が多く用いられている。
- (10) 自動詞述語の場合、「の」と「が」は、共に主体の動作が伴わない語類(存在・状態、変化と知覚・思考・感情)および変化を表す語類が多く現れており、主体の動作を表す語類は相対的に少ない。
- (11) 他動詞述語の場合、「の」と「が」は典型的な他動詞の主体動作対象変化動詞より、主体動作動詞の用例が多い。

(9)~(11)の整理で見ると、動詞の性質の違いによる「の」と「が」の使用状況は、両者が非常に類似している。(9)~(11)の結果から、「の」と「が」の使用状況には、①主体の動作を伴うか否か(動作有り・動作無し)、②主体の動作による対象の変化を伴うか否か(変化有り・変化無し)が重要な要因として働いていることがわかる。この二つの基準に基づいて、自動詞と他動詞を合わせた動詞全体における「の」と「が」の使用状況を見ると、次の表6のようになる。

表6 主体の動作と対象変化の有無による「の」と「が」の使用状況

	動作無し	動作有り・変化無し	動作有り・変化有り	合計
の	168 (65.1%)	74 (28.6%)	16 (6.2%)	258 (100%)
が	372 (59.3%)	195 (31.1%)	60 (9.5%)	627 (100%)

表6で見るように、「の」と「が」は「動作無し→動作有り・変化無し→動作有り・変化有り」の順に使用が減っていき、動作主がない「動作無し」の動詞が6割前後で最も多く、動作主が有り、さらに動作主による対象への変化が加わる主体動作対象変化動詞が1割に満たない使用を示している。この傾向を一般化して言うと、「の」と「が」は主体の動作と対象の変化がなく、他動性が低い動詞に用いられる傾向にあると言える。ここに言う他動性とは、典型的な他動詞である主体動作対象変化動詞が持つ性質を指す。表6の三つの動詞群で他動性が低い語から高い語を順番に示すと、「動作無し→動作有り・変化無し→動作有り・変化有り」になる。これは上記の表6で見たように、「の」と「が」の使用が減っていく順番と一致する。「の」と「が」はいずれも他動性が低くなるほど、よく用いられている。ここでは、これを「意味的他動性回避の傾向」と呼ぶことにする。

### 3.3 主語と述語の間の介在要素

次に、「の」と「が」が主語を表す節の述語の統語的な力について考察する。本稿では、「の」「が」と節の述語の間にある介在要素とその質に注目する。介在要素を見ることで、「の」と「が」の後に来る述語が、述語としての統語的機能をどの程度まで有しているのかを検討する。考察は、介在要素があるか否かかの①介在要素の有無と、②介在要素があるなら、その種類はどのようなものかという②介在要素の種類、の二点に注目する。まず、介在要素の有無についてまとめると、次の(12)のようになる。

#### (12) 介在要素の有無

「の」(全306例)	有り 35例 (11.4%)	無し 271例 (88.5%)
「が」(全715例)	有り 209例 (29.2%)	無し 506例 (70.7%)

(12)で見るように、「の」は主語と述語の間に介在要素がない用例がほとんどで、介在要素無しで主語と述語を直接に結びつける傾向が強い構造であることがわかる。介在要素がない傾向が強いということは、「の」の後に来る述語が、述語と関係する統語的要素を主語に限る傾向があるということである。一方、「が」は、介在要素が無い用例が介在要素が有る用例よりは多いが、「の」ほど介在要素に対する制限は強くない。

次に、介在要素がある場合の介在要素の種類についてみる。まず、「の」の後に来る述語についてみると、「の」の後に来る介在要素は(13a)(13d)のような副詞(さて、また)、(13b)(13c)のような二格(陸に、十七に)の要素が多い。介在要素がある全35例中、副詞の介在例が19例、二格の介在例が9例を占めている。また(13d)のようなへ格(鬼が島え)の介在例が4例、他にヲ格が2例、無格の名詞が1例、節の介在が3例見られる。「の」の場合、介在する要素の種類は副詞と二格が多く、介在する要素の種類も後



の「が」の場合と比較しても、多くはない。

- (13) a. 宰相殿のさてござれば、～。(p. 36)  
 b. 魚の陸に上ったごとく、～。(p. 352)  
 c. 当腹(たうぶく)の十七にならせらるるをば、～。(p. 351)  
 d. 少将の鬼界が島えまた流されたことをもお語りあれ。(p. 60)

「の」と述語の間に二格が介在する場合、二格の名詞は(13b)のように場所を表すか(陸に)、(13c)のように「(十七に)なる」の意味を補充するための必須要素で構成されているという特徴が見られる。二格には「あなたにものを書いていたが」(p. 304)、「婿にとって」(p. 7)のような受け手、資格等を表す用法もあるが、「の」の後の二格は場所を表すものに集中している。また、「の」の後の介在要素について特徴なことは、移動動詞のような自動詞や他動詞の場合でもヲ格の介在がほとんど見られないことである。「の」の後にヲ格要素が介在する用例は、次の(14a, b)の2例のみである。

- (14) a. 義経の都を落ちられたこと (p. 379)  
 b. 官位もないもののこのやうに宮え向い奉って弓を引くことわ (p. 130)

(14a)は移動動詞の自動詞「落ちる」の前に「都を」が、(14b)は他動詞の「引く」の前に「弓を」が介在している。これら2例は、この時期に「都落ち」「弓ひく」という一語が成立しており、述語とヲ格名詞の慣用化した意味的な結びつきが強い語である。他動詞はヲ格を必須格とするため、述語が他動詞である場合は、ヲ格が介在してもおかしくないが、実際の用例は、意味的に慣用化している場合の上記のヲ格の用例以外には見られない。本稿では、このような現象を「構造的他動性回避の傾向」と呼ぶことにする。「構造的他動性」とは、他動性を明示するヲ格が構造内に現れるかどうかの問題で、「の」の場合は、構造内にヲ格が現れない傾向にある。

一方、「が」の方は、次の(15)で見るように、介在要素の幅が「の」より非常に広い。

- (15) a. 敵がはかり事をもつて鶏を鳴かすこともあるものぢやほどに、～。(p. 123)  
 b. 二万あまりの者どもが天も響き、地も動くほどに三度まで鬨をつくった。  
 (p. 125)  
 c. 上総守忠清が富士川でよろいを脱ぎ捨てたをば。(p. 154)  
 d. この卒塔婆が唐土(もろこし)の方えもゆられゆかいで、何しに、これまで  
で伝へ来て、今さらものをば思はするぞと～。(p. 67)  
 e. 忠清が大将に申したわ (p. 129)

(15a, b, c, d)にはヲ格(鶏を、鬨を、よろいを、ものをば)、(15a, d)にはテ節(はかり事をもって、唐土の方えもゆられゆかいで何しにこれまで伝へ来て)、(15b)には回数  
の範囲を表すマデ格(三度まで)と副詞節(天も響き地も動くほどに)、(15c)には場所  
を表すデ格(富士川で)、(15d)には副詞(今さら)、(15e)には受け手のニ格(大将に)  
が介在している。全体の介在要素を示すと、副詞が87例、テ節を含めた節が47例、ヲ  
格が43例、場所を表すニ格が6例、受け手を表すニ格が5例、「～になる」「～に遭う」  
のような動詞の必須要素になるニ格が3例、目的や原因等を表すニ格が5例、へ格が9  
例、マデ格が4例、場所を表すデ格が3例、感動詞が1例、ト格が1例、手段を表すデ  
格が1例、起点を表すヨリ格が1例、対比を表す助詞ハが1例、添加を表す助詞モが1  
例で、「の」より介在要素の範囲が非常に広いことが見て取れる。また、節と感動詞、  
対比の助詞ハ、添加を表す助詞モも介在し、述語がそれらを受けていることから、「が」  
の後の述語の統語的な力は「の」より広く、構造的なサイズも「の」より非常に大きい  
と言える。

また、もう一つ「が」の後の介在要素について特徴的であるのは、ヲ格の介在要素が  
43例で多く見られる点である。ヲ格の性質も(15a, b, c)の「鶏を鳴かす」「鬨を作った」「よ  
ろいを脱ぎ捨てた」のように、主体の動作によって対象物が変化を被るものから(17例)、  
次の(16a, b)のように主体の動作そのものの内容を表すもの(20例)、(16c, d)のように  
主体の動作はなく、思考や知覚の対象を表すもの(6例)まで多様なものが現れている。  
これは「の」の後のヲ格が、述語と共に慣用化して意味的な結びつきが強い語しか見ら  
れなかったのと異なる。

- (16) a. 上洛するものが大衆(だいしゅ)に向うて合戦をするならば、～。(p. 175)  
b. 私が長いことを語りまらしたよりも、～。(p. 408)  
c. 歌人がこれを知る。(p. 259)  
d. 長兵衛の尉がこれを聞いて、～。(p. 110)

このように「が」が用いられる節の構造内にはヲ格が現れることに制約がさほどなく、  
ヲ格の種類も多様であることから、「が」が用いられる構造は「構造的他動性回避の傾向」  
はなかったと見られる。また「が」は、「の」より介在要素の範囲が広く、その種類も  
多様であることから、述語として機能する際の統語的な力が「の」より強く、「が」の  
後の述語はより述語らしい述語であると言える。

#### 4. 述語の名詞性

本節では、これまでに整理した「の」の特徴を、述語の名詞性という観点から捉え直

してみる。これは、従来の研究では説明できなかった、なぜ「の」が使われる構造にある特定の特徴が見られるのかという疑問について、一つの答えが提示できる有効な視点ではないかと考える。筆者は、ある言語現象の現れは有機的な関連性の中で捉える必要があると考える。従来の研究では、現象の記述にとどまっており、諸現象が何を意味するのかということについては論じられて来なかった。本稿は、「の」が用いられる連体節に見られる諸現象がそれぞれ無関係に存在する個別の要因であると考えより、観察された諸現象を有機的に関連付ける理由について考えようとする。ここでは、これを「有機的関連性」の視点と称することにする。

#### 4.1 述語の名詞性とは何か

述語の名詞性とは何かを考えるとき、これに対して、二つのアプローチ法が可能である。一つは「述語の名詞性」なるものを何らかの基準で先に定義して、そこから用例を分析する方法と、もう一つは用例から名詞性を分析し定義する方法である。本稿では、後者の立場を取る。その理由としては、名詞性は具体的な用例の中でしか確認できないこと、また、名詞性なるものが各時代に同じように現れるのかも保証できず、理論的前提を作りにくいことが挙げられる<sup>3)</sup>。

助詞「の」と関わる述語の名詞性を考える言語的材料としては、「の」が名詞と名詞をつなぐ「AのB」の構造を手がかりにする。「の」は「島の流人」「門の外」「平家の方人」のように、名詞と名詞をつなぐ連体助詞としての主要な機能を有している。この「AのB」の構造で、「そなたの出家」（そなたが出家する）、「謀叛の起り」（謀叛が起る）のように、特に、AとBが意味的に主語と述語の関係にあるものを対象として、述語Bの名詞性を考える材料としたい。『天草版平家物語』に見られる「AのB」の構造でAとBが意味的な主語と述語の関係にあるものは、Bの性質の違いにより、次の(17)で見るように、3つのタイプに分けられる。

##### (17) 「AのB」構造（BはAの意味的述語）のタイプ

###### a. タイプ1 名詞・の・動名詞（9例）

そなたの出家、関白殿の御参内、中將の受戒、大臣殿の見参

###### b. タイプ2 名詞・の・動詞連用形／形容詞の名詞形（59例）

平家の思い忘れ、謀叛の起り、人の通い、空の鳴り、都の方の訪れ、馬の長食い、他人の思い嘆き、都え帰り上ることのうれしさ、命の惜しさ、弓の強さ

###### c. タイプ3 名詞・の・準体句（17例）

女房たちの生け捕りにせられてござるが、～と仰せらるれば、～。 (p. 344)

小長刀の常に枕をはなたず立てられたを脇ばさんで、～。 (p. 42)

タイプ1は、「の」が修飾する名詞Bが「出家する」「御参内する」のように「する」を接続することができ、意味的には動作性を伴うものである。本稿ではこれを「動名詞」と呼ぶことにする。タイプ1でAとBは、意味的に「そなたの出家」(そなたが出家する)、「関白殿の御参内」(関白殿が御参内なさる)のように主語と述語の関係にある。タイプ2は、動詞と形容詞が、動詞の連用形、形容詞の名詞化派生接辞を伴い、名詞として派生した場合である。タイプ2もタイプ1と同様に、AとBは意味的に「謀叛の起り」(謀叛が起る)、「人の通い」(人が通う)のようになり、主語と述語の関係にある。タイプ3は、「AのB」の構造で、Bに由来のものが形態的には動詞や形容詞等の用言であるが、統語的には名詞として機能しているものである。例えば、「女房たちの生け捕りにせられてござるが〜と仰せらるれば」(p. 344)の下線部は動詞句であるが、助詞「が」を伴い、統語的には名詞として機能している。AとBは、意味的に「女房たちが生け捕りにせられてござるがその人たちが」のように解釈され、AとBが意味的に主語と述語の関係にある。ここではこれを「準体句」と呼ぶことにする。

タイプ1～タイプ3を基に、「AのB」構造のBに現れる述語の名詞性について、意味的な側面と統語的な側面に注目して検討する。タイプ1とタイプ2は類似点が多く、タイプ3はタイプ1、2とは違う特徴を示すため、タイプ1とタイプ2は同じグループにし、タイプ3は別に分けて考察する。

まず、タイプ1とタイプ2についてみる。タイプ1とタイプ2のBの部分に由来する語の意味的性質を見ると、全68例中、状態が2例(弓の強さ、川の深さ)、感情・思考が33例(他人の思い嘆き、平家の思い忘れ、まことに染めまらしたことの無慚さ)、変化が13例(謀叛の起り、空の鳴り)、動作が20例(人の通い、馬の長食い、人の嘲り)で、語の意味的特性には様々なものが来ている。「感情・思考→動作→変化→状態」の順に使用が減っていき、感情・思考を表す語と動作を表す語が多く、変化を表す語が相対的に少ない。状態を表す語は2例と非常に少ない。全体的に見れば、主体の動作により対象に変化が加えられる、他動性の高い語は見られないということが特徴的である。

次に、タイプ1とタイプ2の統語的特徴について検討する。まず、これらの構造はAとBの間の介在要素が皆無に近いという特徴が見られる。今回の調査対象の範囲で介在要素が見られるのは、「馬の長食い」の1例のみである。この用例は「馬」と「食い」の間に「長」が介在して「馬が長く何かを食べる行為」を表し、「長」は「食い」の意味を副詞的に修飾している。ただし、「食い」の内部の意味を修飾しているだけで、「長」は例えば、「水食い」(水を食う)、「野原食い」(野原で食う)<sup>4)</sup>のような述語に対する項ではない。タイプ1とタイプ2は、Bの述語としての統語的力が非常に弱く、主語とだけ結びつく制約が強い構造であると言える。統語的特徴として次に指摘できるのは、上述の統語的特徴とも関係するものであるが、AとBの間に対象を表す項(ヲ格に相当する)が介在しないことである。これは、そもそも介在要素に対する制約がある構造であ

ることからすると、当然の現象である。ただし、これが特徴的であるのは、「AのB」の構造でBが述語として機能する場合、Aは主語を表す場合が多いが、対象を表す例も存在することからである。例えば、「元服の定め」（元服を定める）、「足の立てどころ」（足を立てる所）、「衣文のかきやう」（衣文を着る着方）がその例である。「AのB」の構造で、主語と対象語が同時に現れる「清盛の衣文かきやう」「清盛の足立てどころ」のような例は存在しない。「AのB」の構造のAの位置には主語か対象語のどちらかが来て、両者が同時に現れないということは、両者は選択の関係にあり、同列には並ばないことの裏返しであると考えられる。従って、「AのB」の構造でAが主語を表す場合、主語か対象語のなかで主語が選ばれると、自然に対象語は来ない構造になるのである。

最後に、タイプ1とタイプ2は、全体ではあくまで「AのB」全体で名詞を成す構造であることを確認しておきたい。この構造は、「の」の後の動詞や形容詞等がAに対する述語としての意味的性質は持っているが、この構造だけで統語的に文を成すことはできない。「そなたの出家」は全体であくまで一語であり、「そなたが出家する」の主語述語の意味で文を終止する際には、「そなたが出家する。」のように動詞、形容詞の形にする必要がある。

以上、タイプ1とタイプ2を対象にして検討した「AのB」構造における、述語Bの特徴をまとめると、次の(18)のようになる。

(18) 「AのB」（タイプ1、タイプ2）構造におけるBの「述語の名詞性」の現れ方

a. 意味的特徴

1. 語の意味的特性は、属性、感情・思考、変化、動作等、多様なものが現れる。ただし、他動性の高い「主体動作対象変化」の動詞は見られない。
2. 語の意味的性質の分布には一定の傾向が見られ、感情・思考→動作→変化→状態の順に使用が減っていく。

b. 統語的特徴

1. AとBの間の介在要素が皆無に近く、Bの述語としての統語的力は非常に弱い。
2. AとBの間に対象を表す語（ヲ格に相当）が介在しない。
3. 全体であくまで1語であり、文を形成することができない。

次に、タイプ3の特徴について検討する。タイプ3のBの部分に来る語の意味的な性質は、全17例の中、(19a)のような存在を表す語（あった）が1例、(19b)(19c)のような状態を表す語（たくましい、優な）が10例、(19c)のように変化を表す語（出いた）が2例、(19d)のような主体の動作による対象の変化を表す語（立てられた）が3例、他に主体の動作を表す語（走り出た）が1例見られる。全体的に、変化や動作がない存

在・状態的な意味を持つ語が多く分布している (17例中11例)。また、主体の動作による対象の変化を表す語の場合でも、(19d)のようにタ形を伴って、動作や変化の終了後の対象物の状態に注目している例で占められている。Bに来る語は意味的に状態的な語に片寄り、対象物の状態・属性を表す傾向が強い。

- (19) a. わが山荘のあったに落ちついて、～。(p. 82)  
 b. 黒い馬の太うたくましいに沃懸地の鞍を置いて乗られたが、～。(p. 148)  
 c. 女のまことに優なが、船中から出て、皆紅(みなぐれない)の扇の日出いたを船端にさしはさうで立て、陸え向うて招いた。(p. 335)  
 d. 銀の蛭巻きした小長刀の常に枕をはなたず立てられたを脇ばさんで～。(p. 42)

次に、タイプ3の統語的特徴についてみる。AとBの間の介在要素は、(19c, d)のように副詞(まことに、常に)が介在しているのが4例、(19c)のように無格の名詞(日)が2例、(19d)のように様態を表す副詞節(枕をはなたず)が1例、見られる。述語の内部の意味を副詞的修飾しているものが大部分で、項としての役割を持つものは(19c)のような無格の名詞の用例である。しかし、無格の名詞は格関係を表す助詞が明示されないため、述語との関係性は間接的で、より述語の内部の意味要素として働いていると考えられる。タイプ3の準体句は、タイプ1とタイプ2よりは介在要素の対する制約は強くないが、副詞的な性質を持つ語句以外の介在要素がさほど見られないという点で、一定の制約を有していたと考えられる。タイプ3は、タイプ1とタイプ2と同様、対象物を表すヲ格も介在せず、全体であくまで名詞のような役割をしており、これ自体で文を形成することもない。

以上、タイプ3について検討した内容を整理すると、次の(20)のようになる。

- (20) 「AのB」構造(Bが準体句の場合)におけるBの「述語の名詞性」の現れ方
- a. 意味的特徴：意味的に状態的な語に片寄り、対象物の状態・属性を表す傾向が強い。
  - b. 統語的特徴
    1. タイプ1とタイプ2より介在要素の対する制約が強くないが、一定の制約を有している。
    2. AとBの間に対象を表す語(ヲ格に相当)が介在しない。
    3. 全体であくまで名詞のような役割をしており、文を形成しない。

以上、「AのB」構造でAとBが意味的に主語と述語の関係にある場合のBの特徴について考察した。タイプ1とタイプ2、タイプ3は三つのタイプが共に統語的特徴にお

いて近似した特徴を示している。意味的にはタイプ1、タイプ2と違い、タイプ3は動作のない状態を表す語が集中している違いが見られた。本稿では、本節で考察した各タイプの特徴が、それぞれのタイプの「述語の名詞性」の現れであると考えられる。これは、連体助詞「の」の後で構文的な位置が名詞で、意味的な機能が述語であることに基づいている。

#### 4.2 主語を表す助詞「の」と「述語の名詞性」との関係

本節では、前節の(19)(20)でまとめた「述語の名詞性」の現れ方を「の」が主語を表す節において見られた述語の特徴と比較検討する。

まず、語の意味的な特徴についてみると、「の」が主語を表す節の述語は「動作無し→動作有り・対象の変化無し→動作有り・対象の変化有り」の順に使用され、他動性が低いほど、「の」が多く用いられていた(3.2.2節参照)。これを「意味的他動性回避の傾向」とした。「AのB」の構造におけるタイプ1、タイプ2の場合、意味的な語の種類は多様なものが来ているが、「主体動作対象変化」を表す動詞は見られなかった。これは、他動性が最も高い「主体動作対象変化」を表す動詞が現れないことで、強い他動性を回避していると考えられる。タイプ3の場合、状態・属性を表す語が多くを占め、状態・属性を表す語ではない場合でも、形態的にタ形を添加することで、対象物の状態に焦点を当てている。他動性という観点からすると、語の性質と句全体の性質が状態・属性を表し、意味的他動性の反対の性質を持つことで、意味的他動性が回避されていると見ることができる。

次に、統語的な特徴について比較する。まず、介在要素についてみると、「の」が主語を表す節は、介在要素がある例が少数にとどまり、介在要素があるとしても、副詞や場所を表す二格が多く、介在する要素の種類も限られていた。タイプ1、2、3も共に介在要素に対する制約が見られ、タイプ1、タイプ2は介在要素が皆無に近く、タイプ3は副詞的な語句の要素が介在するが、これは述語の内部の要素になりやすく、介在要素というより述語の意味と一体になっているものに近い。「の」が主語を表す節と連体助詞として「AのB」の構造を成す場合、介在要素についての制約は、程度の差があるだけで、共通に見られるのである。次に、対象を表すヲ格の介在については、「の」が主語を表す節の主語と述語の間には、ヲ格と述語が慣用化した意味的な結びつきが強い少数の用例以外は、他動詞の場合であってもヲ格が介在する例は見られなかった。ここでは、これを「構造的他動性回避の傾向」と称した。「AのB」の構造においても同様のことが観察されるのは、既に述べた通りである。

最後に、構造のサイズについて比較すると、「の」が主語を表す節は連体節に集中して用いられ、文の終止に現れる例は1例のみであった。「世のあまねく仰ぎ敬うたこと」のような連体節は「の」が主語を表す節の中で最も統語的なサイズが小さく、全体とし

て一つの名詞として機能しているものである。これと類似した現象に「の」が主語を表す節の場合、「の」の後に、名詞述語が使用される例は1例も見当たらなかった。例えば、「大臣が駿河の人だ」のような意味で「大臣の駿河の人ぢゃ」のような構文があってもよさそうだが、このような用例は存在しない。これは、「駿河の人」が述語として解釈されるのではなく、「大臣の」の修飾を受ける名詞として解釈されるということと、「の」は文における断定「である」までには構文的な力が及ばないためであると論じた(3.2.1節参照)。これは、「AのB」の構造が全体であくまで名詞であり、単独では文を成さないこととパラレルである。

以上のことをまとめると、次の(2)のようになる。

- (2) 「の」が主語を表す節と「AのB」構造に見られる「述語の名詞性」
- a. 両構造の述語は、程度の差はあるが、述語の意味的他動性を回避する。
  - b. 両構造の主語と述語の間には、程度の差はあるが、介在要素が制限される。
  - c. 両構造は主語と述語の間にほとんどヲ格が介在せず、構造的他動性が回避される。
  - d. 「の」が主語を表す節の用例は、全体で1語を成す連体節に集中し、全体で1語でそれ自体では文を形成しない「AのB」構造と類似した構造によく用いられる。

このように、「の」が主語を表す節において観察される述語の意味的、統語的特徴は、「の」が連体助詞として「AのB」構造において述語名詞Bが示す意味的、統語的特徴と類似した特徴を示している。以上の考察から、「の」が主語を表す節において観察される特徴は、「の」の本来の機能である名詞と名詞をつなぐ連体助詞の機能から、「の」の後に述語が来る場合、その述語が見かけ上は名詞でなくても、述語の名詞のような性質に係ろうとしたため、生じたものであると、と考えられる。

## 5. まとめと課題

本稿では、「有機的関連性」を考慮する立場から、『天草版平家物語』における主語を表す助詞「の」の使用状況を述語の統語的な特徴と意味的な特徴に注目し考察した。次に、助詞「の」が連体助詞として用いられる構造に見られた「述語の名詞性」と比較した。結果、両者の特徴は程度の差はあるものの、概略、パラレルに現れていた。本稿の考察は、なぜ、「の」が主語を表す節に特定の特徴が観察されるのかという問題について、有効な答えが提示できると考えられる。この問題は従来の研究では、未開拓の分野であった。



本稿で考察したBが述語になる「AのB」の構造については、用例が比較的少なく、おおまかな考察にとどまっているため、より詳細な考察が必要であり、今後の課題である。また、本稿では、助詞「が」については、「の」と比較するだけで、有機的関連性という視点からの考察は行っていない。これについては接続助詞「が」との歴史的な影響関係を考える必要がある。稿を改めて論じたい。

## 注

- 1) 主語を表す「が」が、なぜ、このような順番に現れるのかについては、別の考察を加えなければならない。本稿の当面の課題は「の」に注目しているため、ここでは、詳細の検討はしないが、筆者はこれには接続助詞「が」との関係を見る必要があると考えている。これについては、考を改めて論じたい。
- 2) 主体動作対象変化動詞には、厳密に言えば対象への変化は加えられていないが、主体の動作が対象へ及んでいる動詞も若干含まれている（襲う、召す（「呼び入れる」の意味）等）。
- 3) 述語の名詞性については、拙論（金（2009）、KIM（2010））の考え方を引き継ぐものであるが、各時代の関連する言語体系との相関関係を考慮する必要があるという点を付け加えて述べておきたい。
- 4) 「水食い」「野原食い」の用例は、筆者が理解の便宜のために作ったもので、実例ではない。

## 参考文献

- 江口正弘（1986）『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院
- 江口正弘（1995）「天草版平家物語の「が」・「の」について」『国文学』146 広島大学国語国文学会
- 大野晋（1977）「主格助詞ガの成立」『文学』45-6, 45-7
- 金銀珠（2009）「現代語の連体修飾節における助詞「の」」『日本語科学』25 国立国語研究所
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版
- ヤコブセン、ウェスリー・M（1989）「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』くろしお出版
- 山田昌裕（2000a）「主語表示「が」と「の」—原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』との比較—」『立正大学国語国文』38
- 山田昌裕（2000b）「主格助詞「ガ」の勢力拡大の様相—原拠本『平家物語』と『天草版平家物語』との比較—」『国語学』201
- Eunju KIM (2010) Predicates with a Genitive Subject in Old Japanese: A Descriptive Study of Their Morphological and Semantic Characteristics, *MIT Working Papers in Linguistics* 61, 77-88.
- Hopper, P. J., and S. A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse, *Language* 56-2, 251-299.